

令和4年度 土浦日本大学高等学校自己評価結果

本校の目指す学校像	<p>日本大学の建学の精神を礎とし、次の方針を掲げ、21世紀にふさわしい充実した学園生活を目指す。</p> <p>(1) 一人ひとりの志を大切にし、その実現を支援します。</p> <p>(2) 心身ともに健康でたくましく気品ある人を育成します。</p> <p>(3) 基礎学力の充実に徹します。</p> <p>(4) 積極的な進路指導に力を入れます。</p> <p>(5) 国際化・共生化に対応できる能力開発に努めます。</p>
-----------	--

本校の特徴および課題	<p>本校は、日本一のスケールと多様性や可能性を持つ総合大学、日本大学の附属高校であるという安定した基礎の上に、生徒一人ひとりの志を尊重し、その成就を支援する3コース5クラス制を敷いている。各コースの特色を活かして、1. 学力向上に関する取り組み、2. 進路指導に関わる取り組み、3. 学校生活に関わる取り組み、4. 生徒会・部活動に関わる取り組みなどを連携させ、生徒一人ひとりの目標にしっかり答えられるよう指導力の向上に、継続して努力したい。</p>
------------	--

令和4年度取組結果	<p>大学受験のための新学力検査「大学入学共通テスト」への対応を進めてきたが、小幅な変更にとどまった制度面については十分な対応ができた。しかし、出題傾向の大幅な変化は、今年度も受験生の混乱を招いたところがあり、その対応に注力したい。この後も文部科学省・大学入試センターから提示されるであろう追加の変更についても引き続き注視していきたい。日本大学附属高等学校の推薦入学制度への対応が機能し、成果が出ている。さらに、新学習指導要領にあわせた新しい学習・カリキュラムも完成し、さらなる適応のための一部変更もなされた。これらに合わせ、表現力を高めるためのアクティブラーニングの実践や、ICTを利用した教育活動もレベルアップをめざし、活用方法の一層の研究を進めたい。進路実績も、日本大学への進学者数は目標を達成し、国立大学への合格実績も目標に届く結果となった。施設面での学校内のトイレの改修、右靱桜グラウンドの整備、体育館のエアコン設置などが終了。経年劣化への対応改修も着実に進展している。感染症拡大防止対応のための機器設置なども含め、教育環境の充実も前進している。</p>
-----------	--

目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況	<p>A：取組目標が達成された B：目標はおおむね達成された C：課題を多く残している D：成果が出ていない</p>
-----------------------	--

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況
教育活動 (教務)	①目標の設定について	ICT教育の推進を含めた、教員資質の向上。	B
	②活動の実際について	全1,2年学年の生徒全員がタブレットを所有し、授業時の活用だけでなく、課外活動など、活用の場が広がった。教員研修を通しての基本的な活用方法を踏まえ、各教員が独自に工夫をして活用する姿勢が見られた。外部研修への積極的な参加に至らなかった点が次年度の課題である。	B
	③活動の点検について	新任教員を含め、ICTの活用に向けた研修・技術が内部で継承されていくように工夫した。今年度より導入したオンライン研修も活用し、新任教員研修をはじめとする様々な教員の指導力の向上に反映させた。また、学級経営・学年経営についての研修も継続させ、いじめ防止や発達障害・不登校への対応も含めた、教員の対応力向上も引き続き確認した。	B

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況
教科指導 (教務)	①目標の設定について	新学習指導要領実施初年度における円滑な業務運営。	B
	②活動の実際について	全日制課程においては、新たな振替および新旧のカリキュラムが混在する時間割での運営となった年度であったが、特に問題なく進めることができた。通信制課程においても新たにコース制を設定した年度であったが、カリキュラム面では概ね問題なく進めることができた。	B
	③活動の点検について	全教員を対象にした研修会は実施できなかったが、新カリキュラムにおける指導方法や観点別評価導入について、教科主任と情報共有している。大学入学共通テスト対策などや定期考査問題改革については、昨年引き続き教科内での検討を進めた。	B

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況
学校生活への配慮 (生徒指導)	①目標の設定について	①あいさつの励行 ②端正な服装頭髪の徹底 ③いじめの根絶 ④社会のルールやマナーの遵守	A
	②活動の実際について	①あいさつの励行：コロナ禍でのマスクの着用で大きな声での挨拶はできていないが、以前よりも良くなってきている。校長先生を始め先生方が毎朝登校時に挨拶の範を示していたり、再開することができた生徒会によるあいさつ運動等を行ったりして、今後の改善に期待したい。 ②端正な服装頭髪の徹底：身なりはおおむね良好で、頭髪・服装に関しても、厳しい指導を行わなくてはいけない生徒は少なくなっている。 ③いじめの根絶：いじめとなりそうな事案を早期発見し対応できた結果、大きな問題にならずに済んでいる。ただしSNSを介しての人間関係のトラブルに発展するケースがあり、情報モラル教育の指導に一層の重点を置く必要がある。 ④社会のルールやマナーの遵守：苦情については学校周辺の路上や近隣店舗駐車場での送迎が主であり、登下校中の生徒のマナーについては良くなっているが、依然として歩きスマホが無くならない。 上記のような状況が見られるが、多くの生徒はきちんとしており、トラブルやクレーム等も年毎に漸減している。	B
	③活動の点検について	定期的な生徒指導部会議で問題点の共有を踏るとともに、登下校の立哨指導や自転車の安全運転指導を継続してマナーの向上に努めていく。保護者宛メール文書にも現状の問題点など記載し理解、協力を継続的に促す。特に、自家用車による送迎は保護者へのメール配信を利用して、更なる理解協力を促していく。いじめの根絶については、いじめ防止対策室・教育相談室との連携を密にして根絶に取り組んでいく。	B

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況
生徒会・部活動 (生徒指導)	①目標の設定について	生徒会活動や委員会の活動において、生徒が主体的な活動ができるようにする。また、そのように感じることができるようサポートする。	B
	②活動の実際について	昨年度に引き続き、コロナ禍の影響で生徒会活動やクラブ活動などに制限を受けたが、あいさつ運動やクリーン作戦運営、部活動の応援活動など、徐々にコロナ禍以前の活動が再開できるようになった。部活動は昨年度よりも活発に活動することができ、運動部のみでなく文化部でも大きな成果を上げることができた。県総体アベック優勝を目指すとともに、全体での部活動加入率を高めていきたい。	B
	③活動の点検について	生徒会本部、各委員会の活動計画作成を促し、それに基づく主体的な活動を見守り、助言していく。生徒会・委員会・部活動各担当教員からの報告をしっかりと把握し、活動状況を確認しながら、一層の情報発信にも努める。クラブ活動は、引き続き加入率の向上を促し、ホームページなどにタイムリーに情報を発信していく。	B

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況
進路指導	①目標の設定について	①日本大学附属推薦入試への適切な対応 ②国公立大学、難関私立大学の合格者数の増加 ③推薦入試、調査書、進路統計、各種調査報告等への適切な処理 ④各種講演会の開催 以上の目標を掲げたが、概ね良好に運営でき、着実に成果を挙げた。	A
	②活動の実際について	①情報共有として、日本大学学校推薦型選抜制度（附属学校等）の仕組みを解説する動画を作成し、保護者への周知を図った。日本大学学校推薦型選抜（附属高等学校等）合格者数は335名、短期大学1名、通信課程5名の生徒が日本大学への進学を果たした。 ②3月24日現在、国公立大学合格者118名、東京大学1名、北海道大学6名、東北大学4名、筑波32名、茨城24名、茨城県立医療大学4名のほか、医学部医学科にも合格者を出すことができた。旧帝国大学合格者14名と過去最高の結果を出すことでできた。難関私立大学合格者は早稲田16名、慶応4名、上智5名、東京理科大学24名、明治27名、青山学院18名、立教17名、中央22名、国際基督教1名、東京女子医大の医学部医学科1名の合格を得ることができた。入試対策指導は今年も実を結び、進路実績全体に大きな成果をもたらしている。 ③調査書や書類を発行については学年団、教務部、情報処理室、事務局と連携を取り、円滑に進めた。また、書類作成時期を早めたことで遅滞なく行うことができた。多様化する入試に対応するためにも、推薦書などをデータ化し、一層の効率化を図りたい。模試や基礎学力の分析は、内容を充実させることで進路指導に活かせる資料の作成に努めた。 ④コロナ禍が収束傾向の中、日本大学出張講義（3回）や医療系講演会、法曹界講話を実施した。父母と教師の会の各支部から依頼を受けている進路講演会は、いくつかの支部で開催することができた。日本大学学校推薦型選抜制度（附属学校等）に関する説明は、解説動画を作成し、情報提供に努めた。	B
	③活動の点検について	①日本大学学校推薦型選抜方式の出願方法や合格後の手続き方法が年々変化している。確認不足などからミスが発生しないよう注意する。生徒・保護者の志望学部・学科などの確認を確実にし、若手担任教員への支援と情報提供にも引き続き努力する。 ②国公立大学、難関私立大学合格者数増加のため、推薦入試に対する指導から、その内容や方法の確認を怠らないようにする。日本大学のN方式については、附属のメリットとして一般受験の生徒についても指導を確認する。 ③新課程に向けて、英語4技能に係る指導を、英語科・教務部と強化していきたい。調査所等の書類形式についても、教務部・情報処理室との連携を確実にして準備を進めたい。進路統計、各種調査報告等への適切な処理・運営については、これまでの形態に甘んじることなく、さらに改善を図っていく。 ④生徒対象の講演会は生徒の事後レポートを点検するにとどまらず、ポートフォリオに蓄え、推薦資料としての活用に備えたい。父母と教師の会の各支部から依頼を受けている進路講演会は、動画視聴にしている。その形態を検証したい。	B

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況
体育施設	①目標の設定について	教職員及び生徒の安全管理	B
	②活動の実際について	事務局と連絡を取り合いながら、補修を行うことができた。 また、破損箇所を見つけるだけでなく、「どうすればより良い活動ができるか。」を考え、けがや事故のない施設の管理を行うことができた。 右右桜グラウンドの砂量の調整など、季節に応じて整備できた。	B
	③活動の点検について	事務局担当者と連携して、年間を通して施設を見回り確認管理を行った。また、老朽化だけではなく、ぶつかったりして破損するところを発見修理することができた。しかし、「壊れたら直す」の前に「壊れないように」使用する指導も行った。常に安全管理ができるように年間を通して見回ることができた。右右桜グラウンドは、芝生が剥がれている箇所が数箇所あり、コースも砂量の違いのせいもあって、全てが均等になっていなかったため、季節も考えながら年間を通して整備できるように点検できた。	B

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況
保健衛生	①目標の設定について	①感染症対策の充実を図る。 ②生徒及び教職員の健康の保持増進を図る。 ③教育環境の保健安全確保を図る。	A
	②活動の実際について	①昨年度に引き続き学校欠席者情報システムとコロナ感染防止対策としての欠席者情報の運用で、新型コロナウイルスによる感染の拡大防止に対応した。また、毎朝昇降口で教職員による生徒への検温・手指消毒の奨励を行った。 ②コロナ禍においても健康診断を、校医の先生方の協力により年間を通して実施することが出来た。生徒一人ひとりの健康状態を把握し、健康及び生活習慣の適切な健康指導を実施、保健室の適切な利用の啓蒙を継続している。 担任との連携を通して、悩み等の相談にカウンセリング室を利用し易い環境作りに取り組んでいる。コロナ禍の中でも相談できるようにオンラインでの相談も実施した。教職員の健康に関しても、年間計画の中で健康診断を実施し、健康管理及び生活習慣の改善等の助言を実施してきた。 ③産業医と衛生委員会を中心に、事務局との連携において学校環境の安全・安心のための環境整備、改修が長期計画の中で進められている。また、常時衛生委員会を中心に学校環境の安全・安心への対策配慮がなされている。 今年度に関しては、コロナ禍の中、現状を知ると同時に、感染症対策や健康管理についても話し合い、教職員への情報提供を行った。	A
	③活動の点検について	①欠席者について毎日情報を先生方で共有し問題なく順調に機能し、早期の対応ができていますか確認している。 ②産業医と保健室が連携し健康診断実施率は100%であり、事後措置も徹底されている。 ③衛生環境に関して、事務局より定期環境衛生検査等が専門会社において定期的に検査、点検が実施されている。事後措置も徹底されており、学校環境の安全・安心への対策がなされている。 *保健室のセンター的役割を充実させて、生徒の健康・発達課題に対して教職員との連携を行い組織的な支援をとってきた。また、保険委員会が健康・精神衛生面での情報の提供等を実施し、感染症対策においても流行時期には予防等の情報や提案を通して流行拡大を防いできた。当年度のコロナ禍に対し、現場対応が出来るだけの備品の備蓄をいち早く充実させた。	A

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況
教育相談	①目標の設定について	「生徒の学校生活への適応と、教員の不適応生徒への対応を支援する」という目標および、そのための①～⑨の取り組み方策の設定は適切であった。	A
	②活動の実際について	①「新入生に対する教育相談ガイダンスの実施」については、計画通り行うことができた。構成的グループエンカウンターにおいては、新入生の仲間作りのきっかけとなった。 ②「学校不適応調査の実施」については、年間を通じて担任に学校不適応生徒の状況を入力してもらい、教育相談部会での支援策検討に活かすとともに適宜対応に繋げることができた。また、これらの情報は学年主任や管理職とその都度共有することができた。しかし、残念ながら状況の改善に至らず、転籍や転学等の判断をする生徒が一定数いることも事実である。 ③「高校生活に関する調査の実施」については、年3回の調査における教育相談に関する項目の結果を教育相談部会に活かすとともに学年主任と共有した。しかしながら、今年度は担任からの声掛けでスクールカウンセリングに繋がった事例が少なかった。 ④「カウンセリングの随時実施」については、生徒や保護者の希望で実施したり、教育相談部員やカウンセラーからの声掛けに応じて実施したりするなど、随時行った。また、電話やリモートによる相談も実施した。 ⑤「保護者との連携」については、新入生ガイダンスブックに「教育相談体制」を掲載したり、学校ホームページに「カウンセリングだより」を定期的に掲載するなど、保護者への情報の周知に努めた。 ⑥「特別支援計画の立案」については、今年度は該当するケースがなかった。 ⑦⑨「スクールカウンセラーとの連携による担任支援」については、毎日カウンセラーが出勤している体制を整え常に情報を共有することで、不適応生徒やその対応に苦慮する担任を支援することができた。 ⑧「定期的な教育相談部会の開催」については、原則週2回（通算45回）実施することで各コース学年からの不適応生徒に関する情報を常に共有し、早期対応に努めた。	B
	③活動の点検について	担任が随時入力できる「学校不適応調査」の内容や保健室を訪れる生徒の様子などを共有し支援策を検討する教育相談部会をこまめに開催することで、生徒の状況変化への対応や、新たに不適応傾向が見られる生徒への早期対応、生徒対応に悩む教員の支援などに繋げることができた。また、生徒の状況を年6回「要支援生徒リスト」としてまとめ、学年主任や管理職と共有した。近年は学校不適応生徒が社会で増加していたり、新型コロナに関わる体調不良と不登校との見極めが難しく不登校生徒への支援が遅れてしまったりする一方で、受け皿としての通信制高校の拡充が進み転学者が増加しており、今後の課題となる。また、調査結果の担任における活用について、さらに強く呼びかけていきたい。さらに、年々児童相談所からの通報が増えており、社会全体で子どもを守るという観点から、場合によっては保護者に対して毅然とした立場を取るべき学校の役割を再認識する必要がある。	B

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ活動の達成状況
いじめ防止対策	①目標の設定について	「本校いじめ防止基本方針に基づいて『未然防止』『早期発見』『適切な対応』『再発防止』の各取り組みを実行し、学校を挙げて『いじめ根絶』の目標を達成する。」という目標設定は適切であった。	A
	②活動の実際について	<p>(1)「未然防止」について 生徒集会におけるいじめ防止講話は、毎学期始業式の集会において久しぶりに対面で行うことができた。「いじめの根絶」を生活目標とした週には、各担任が実情に合わせた講話を行い、いじめ防止を呼びかけた。4月には、新入生に向けてのネットモラル勉強会を行うとともに、新しい学級編成となる1,2年生に対して教育相談部・学年と連携して構成的グループエンカウンターを実施し、望ましい人間関係作りを支援した。9月を「いじめ防止対策強化月間」としているが、各コース学年ともに実情に応じた学習企画を立てて実践することができた。ただし、総進3学年だけは、基礎学力到達度テストとの兼ね合いで時期をずらしての実施となった。</p> <p>(2)「早期発見」について 年度初めの教職員会議で、全教員に対して「いじめ早期発見のためのチェックリスト」活用を呼びかけた。いじめ調査を学期ごとに実施したことに加え、二者・三者面談時に担任からいじめ被害の聴き取りを実施した。教員と生徒の信頼関係を構築する中で、軽微なトラブルも早期に相談できる雰囲気を作るよう呼びかけた。</p> <p>(3)「適切な対応」について アンケートや生徒・保護者から申し出のあった案件はすべていじめ防止対策室の全体会議で取り上げ管理職へも報告した。いじめが疑われる事案については、客観的事実に迫れるよう複数教員が調査に当たるなど、慎重に対応することができた。今年度いじめ認定をしたのは3件であり、いずれも重大事態には該当しない。</p> <p>(4)「再発防止」について 今年度いじめ認定した3件のうち2件については、担任はじめ関係教員の適切な指導および保護者のご協力により加害生徒の反省に至ることができ、解消を確認することができた。残る1件については現時点で解消に要する期間を経っていないが、解消が確認されるまで継続して指導していく。</p> <p>(5)「教員の共通理解」については、職員会議毎にいじめ防止対策室長または議長から話をするなどで、教員全体のいじめ防止に対する意識向上に繋げることができた。</p>	B
	③活動の点検について	アンケート調査結果などによりいじめが疑われる事案のすべてについて、法に基づいて組織的に検討した結果、いじめと認定した事案は3件であった（昨年度は4件）。関係教員の適切な対応により、いずれの事案も深刻化する前に把握・対応できたことから重大事態に発展することはなかった。近年、男女交際に端を発する問題が発生しており、家庭の協力も得ながら未然防止に努めたい。	B

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況
図書	①目標の設定について	①「わかりやすい書架サイン（分類表示）、タイムリーな展示・コーナーづくりを行う」 ②「視聴覚資料の整理と内容の充実を図る」という取り組み目標の設定は適切であった。	A
	②活動の実際について	①については以下の取り組みをした。 ・分野ごとにわかりやすい内容のサインを作成し、書架に表示する。 ・配架整理を進め、書架の棚にスペースを作り展示する。 ・展示書架だけでなく、図書館入り口、各階踊り場、カウンター等の目につきやすい場所にコーナーを設置し、定期的に内容を更新する。 ・時事に関する本、話題の本、お薦めの本など利用者の興味を惹く内容の本も展示する。 ・図書委員会で作成したポップを活用し、本を手に取りやすい工夫をする。 ②については以下の取り組みをした。 ・利用しないビデオを廃棄し書庫のスペースを空けるとともに、DVDへの入れ替えを行う。その際に、教科とタイアップした資料の購入に努め、授業での利用促進を図る。 ・PC検索時に視聴覚資料の内容紹介が分かると利用しやすいため、書誌情報の追加（内容の詳細）を行う。 ・文学作品（洋書含む）への導入のきっかけとなる映画化作品を揃える。 ・歴史や芸術の教養分野やドキュメンタリーを強化する。	A
	③活動の点検について	①書架サインについては、利用者が本を探す手がかりとなる「日本十進分類法」の第一次区分（類目標）を作成し、掲示した。コーナーづくりについては、世界情勢や国内の時事・話題に関する資料、行事に関する資料を展示した。タイムリーに紹介するため、旬の本の情報を得ることに努め、早期の購入、装備を心がけた。また、長期休業前には、図書館便りで各コーナーの紹介をし、利用を呼びかけた。同年代の薦める本や新しい本との出会いのきっかけを作る狙いで、階段踊り場に設けた図書委員会のコーナーでは図書委員会作成のポップを活用し、図書の紹介を行った。また、今年度は、3年生が国語の授業で作ったポップを図書館3階カウンター上に展示した。 ②視聴覚資料については、視聴覚ギャラリーに配架してあるビデオを書庫へ移動する手続きを適宜行った。それに伴い、書庫の視聴覚スペースを確保するため、利用頻度の低い物、内容が改変されている資料を選択し、積極的に廃棄することで保管場所の確保に繋がった。視聴覚資料の詳細が分かるよう、内容の紹介や各賞受賞の情報等、書誌情報（資料を特定するための情報）の追加入力を行った。過年度分の資料については、時期を見て追加入力を継続した。今年度は文学作品への導入のきっかけとなる映画化作品、歴史、ドキュメンタリーを強化した。また、劣化により壊れやすくなっているパッケージを確認し、破損しているものは交換を行った。	A

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況
広報 (情報入試)	①目標の設定について	<ul style="list-style-type: none"> ●求める生徒像に合致する入学生を今まで以上に獲得する入試広報活動への挑戦 ●募集対象の受験生を取りまく環境変化に対応する広報活動 <ul style="list-style-type: none"> ・受験対象生徒の居住地域の変化 ・受験対象生徒の学力状況の変化 ・「千葉県私立高等学校授業料減免制度」の充実 	A
	②活動の実際について	<p>【中学校訪問】年間3回実施した。第1回(5月～6月)では、在籍状況、学習状況の確認を行い、学校案内パンフレット、中学生対象イベント・進路実績等を掲載したリーフレットを配布し、高校生活をイメージしてもらうように広報を行った。第2回(9月～11月)では、中学校学年会議に出席して入試制度の詳細について説明し、本校入試への指導、協力を依頼した。説明会を実施した。</p> <p>【見学会・説明会等】コロナ禍の学校見学会、入試説明会では、オンラインと対面のハイブリットで実施した。外部説明会も積極的に参加し、受験生・保護者と直接相談する機会を増やした。</p> <p>【入試運営】コロナ禍においても受験生・保護者が安心して受験できるような試験運営を心掛けた。</p>	A
	③活動の点検について	年間を通じて、毎週月曜日の1校時に打合せを行った。前週の活動、今週の活動の点検を行うことで、問題点等を話し合うことが出来た。	A

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況
管理運営 (教学)	①目標の設定について	「調和の精神を尊ぶ青年が育つ、活気あふれる進学校」を目指す。 A)いじめ防止対策推進,B)国公立大学受験対策推進,C)基礎学力到達度試験対策推進,D)大学入試改革への対応,E)新学習指導要領対応推進,F)ICT教育推進などによる	A
	②活動の実際について	<p>A)いじめ防止対策室中心に、啓蒙と指導を重ねた結果、県に報告するような重大事態の発生は今年もなかった。いじめ認定いたる事例はあったが、その多くがSNSを介したトラブルであり、“ネットモラル勉強会”などの対策を継続して指導することが求められている。</p> <p>B)特別進学コースでの、習熟度に合わせた指導と対応が効果を上げている。特に推薦入試発表の時点で、東京大学1名、北海道大学2名、東北大学3名、筑波大学22名(うち1名医学類)、茨城大学6名、千葉・お茶の水・九州大学各1名となった。前後期日程での合格を合せ、北海道大学6名、東北大学4名・大阪大学1名、九州大学2名、筑波大学32名、茨城大学24名、千葉大学2名、お茶の水大学1名など、国公立大学合格者合計118名と健闘した。</p> <p>C)日本大学への推薦入学予定者は331名となった。対策室主導の集中講座や補習等は、コロナ禍で一部に制限を受けた面もあったが可能な限り開講し、今年度も一定の成果を上げることができた。生徒・保護者の希望を叶えるための出願指導も機能した。</p> <p>D)大学入試改革は、コロナ禍もあり民間試験導入延期など変更の縮小が示されたが、入試問題の出題方法の変更は、今年度も受験生に混乱をもたらしている。一時停止していた制度変更の動きなども含め、今後の動きを注視していきたい。</p> <p>E)新学習指導要領に合わせたカリキュラム案も整い、対応策はそれぞれ前進している。さらなる適応のための一部修正も加えられた。教務部や情報処理室、カリキュラム検討委員会など連携を密にし、魅力ある本校の教育があ打ち出せるよう運用していきたい。</p> <p>F)ICT機器導入が2・1年生と広がり、来年度は全学年となる。オンライン学習・授業での活用などへの取り組みも前進したが、さらなる内容の充実と利用方法の拡大、併せて生徒の使用モラル定着を進めていきたい。</p>	B
	③活動の点検について	どの目標に対しても、“PDCA”のサイクルを常に意識し、点検と改善に努める。	B

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況
管理運営 (事務)	①目標の設定について	①予算編成(配分)方法の検証と減価償却引当特定資産の積立 ②教育環境の充実・維持 ③創立60周年記念事業に向けての準備 ④諸規程の見直し	B
	②活動の実際について	①急激な電気料金の高騰をはじめとした物価高のなか、減価償却引当特定資産の積立の検討、次年度における予算編成の検討を適宜行った。電気料金に関しては、父母と教師の会本会・各支部、後援会、体育後援会より、寄付金を受領するなど保護者の協力を得ながら学校運営が行われた。 ②校舎の経年変化に対応していくため、本館・2号館・総合学習情報センターの屋上防水工事を実施した。また、本館2階教職員用トイレ改修工事を実施し、生徒・教職員の衛生環境の充実を図るため計画的に実施してきた校内トイレ改修工事が完了するなど、教育環境の充実を図ることができた。 ③本学園は、令和5年度に創立60周年を迎えるにあたり、記念誌の編纂等を委員を中心に行った。 ④諸規程全般について、社会的な要請、学校運営の現状等にあった形で変更が必要な内容を定期的に検証を行った。	B
	③活動の点検について	①少子化の進行、新型コロナウイルスへの対応など社会的な変化があるなか、予算編成方法の検証と将来に対する計画立案が重要となっており、令和4年度は、電気料金の高騰等の急激な社会状況の変化なか適切に実施することができた。 ②教育環境の充実を図り、生徒が快適且つ便利で、学校生活を送りやすいと実感する教育環境の整備を心がけていく。また、生徒の安全を第一義に考えて、必要な施設設備の整備については、優先的に取り組む方針のなか、重要性が高い事業を実施することができた。 ③創立50周年からの10年間、また、創立からの学校の取組について、編纂のなかで整理され、今後の学校の発展を検討するための基盤とすることができた。 ④令和7年度に私立学校法改正が予定されるなど、諸規程の見直しが重要な施策となっている。今後も引き続き、諸規程全般について、社会的な要請、学校運営の現状等にあった形で変更が必要な内容を定期的に検証を行っていく。	B

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況
庶務	①目標の設定について	①継続性を持った取り組みと行事計画の見直し。 ②同窓会・父母と教師の会の活性化。 ③防災計画の見直し。	B
	②活動の実際について	①昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの影響によりさまざまな行事において活動制限を余儀なくされたが、創意工夫をしながら活動再開に向けた足がかりを作り、オンラインで可能なことと対面でやるべきことの精査ができた。部内の組織化も進み、適した人員配置と作業割り振りができている。部会も定期的に関き庶務部関連行事の情報共有を行いスムーズな部署運営が行うことができた。 ②役員会の実施にあたっては、オンラインと対面を両立することで中止することなく活動した。また、研修旅行や支部活動についても徐々に再開することができた。 ③形骸化していた避難訓練を緊張感が保てるように実施方法に工夫を加えながら再開することができた。生徒だけではなく教職員に対する防災教育の必要性についても認識することができた。	A
	③活動の点検について	①各行事後に各係毎に意見をもらい、準備の効率化につなげられたかどうか引き続き点検していく。また、定期的な部会の開催で確認していく。 ②会長との密な連絡と内容の確認していく。 ③施設の点検等事務局との連携を進めていく。	B

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況
総合進学コース (含スポーツクラス)	①学習指導	<p>《進学クラス》 1学年：生徒の学習活動の中心となる授業にきちんと取り組ませるため、授業開始1分前着席を徹底した結果、授業への取り組む姿勢は概ね良好であった。また、教科と連携しHRの時間を活用した確認テストを実施したことで、基礎的知識の定着と家庭学習の習慣化を培うことができた。 2学年：基礎学力の定着のため、教科と連携して確認テストや週末課題を実施した。これらの取り組みをすることで家庭学習時間を確保させることができ、学習習慣の確立を図ることができた。 3学年：基礎学力向上を目標に、朝学習・授業・課外授業の流れを確立させ、受験生としての意識や自主性を身につけることができた。サマー集中ゼミや基礎学力到達度テスト直前課外については、理科・地歴公民科を中心に苦手分野の克服と試験範囲の内容を再確認を行った。その結果、好成績を収めることができた。</p> <p>《スポーツクラス》 生徒個別の学力、性格などを把握することに努め、各生徒の個に応じた手厚い指導体制を構築した。学年教員、教科担当者、担任、部顧問で連携をとり指導した。 また、コロナ渦の影響により対面授業を中心にリモート授業も含め、臨機応変に対応したが、授業担当者にはかなりの作業負担をかけた面があったかと思う。学習面では、欠点者も少数で特に問題はなかった。</p>	B
	②進路指導	<p>《進学クラス》 1学年：卒業生講演会では、職業の多様性を知り見識を広げ、進路適性検査の結果では、自己理解を深めることができた。また、進路ノートを用いて大学研究をすることで興味関心の高い分野を明確にすることができた。これらの活動と二者面談や三者面談より、個々の適性に合った文理選択や科目選択をすることができた。 2学年：日大出張講義や医歯薬・医療系講演会・オープンキャンパスへの参加を通じて、大学での学問への理解や進路への意識、適切な職業観を養うことができた。 3学年：志望理由書や小論文の指導を通して、自らの適性や関心事項について理解を深め、進路について見識を広げることができた。また、面接練習も複数の教員が携わることで、様々な視点から指導ができ、生徒に幅広い視野・意見を持たせることが可能となった。学年で情報交換を徹底し、生徒に合わせた指導の結果、日本大学への合格者は、進学クラスでは78.6%、スポーツクラスでは23.9%、学年全体では70.6%であった。また、セレクション第一志望通過者も67.9%であり、目標を達成することができた。</p> <p>《スポーツクラス》 生徒個別の学力の把握に努め、それを基本としたホームルームでの進路指導が重要になることを踏まえ、進路ガイダンスや日大出張講義などを通し進路意識の向上に努め、総合型選抜、推薦、日大基礎学力などあらゆる受験への対応を図り、生徒の充実した進路実現に努めた。特に3学年担任と面談を定期的に行うことで、クラスの進路状況を随時正確に把握できた。また、保護者との連携も最重要項目としていたが、それも概ね達成できた。</p>	B
	③生徒指導	<p>《進学クラス》 多くの生徒が落ち着いた学校生活を送ることができており、高校生としての身だしなみを逸脱している生徒は、ほぼ見受けられない。教育相談部、教育カウンセラー、保健室等の各部署と情報共有をし、こまめな声かけを定期的にするすることで、生徒の把握・理解に努めることができた。</p> <p>《スポーツクラス》 爽やかで礼儀正しい、けじめあるアスリートを目標に、「今やれることを全力で」取り組ませた。担任と部活動顧問が連携を図り、生徒指導にあたる。また、メンタルトレーニングやホームルームなども利用した。 授業第一主義を掲げて居眠りや授業妨害などせぬよう教室巡回を徹底して行った。その成果もあり、大きな乱れやクラス間での格差がなくなり、学習効果も上がった。</p>	B
	④特別活動指導	<p>《進学クラス》 蓼科宿泊学習、修学旅行をはじめとし、文化祭や体育祭などの学校行事の開催を通して、友人とのコミュニケーションを図ることやクラスの絆を深めることができた。また、様々な学校行事において、個々の生徒が学習と両立しながら積極的に参加し、自ら判断して行動することができた。</p> <p>《スポーツクラス》 各種学校行事に率先して取り組み、他生徒からの信頼を受ける生徒に成長させることを目標に指導した。今年度もコロナ渦の影響で中止や縮小となった行事があったが、人の嫌がる仕事を率先してこなし、クラスメイトと協力して学校生活を送れるよう指導してきた。スポーツ大会や体育祭などコロナ禍でもやれる範囲での全力を尽くす姿がとても印象的であった。スポーツクラスが体操から牽引して率先して盛り上げることができた。</p>	B

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況
特別進学コース	①学習指導	<p>難関大学に合格できる高い学力、専門分野への知的好奇心、ルール・マナーを守る社会性の3点を高めることを目的とした学習指導を行ってきた。特に、学校推薦型選抜に適應できる得意科目を伸ばす指導と探求型学習としてのインタレストラーニングを導入し、一定の成果が得ることができた。</p> <p>1 学年：課外授業とオンライン指導を両立させて学習量を確保し、基礎学力の定着を念頭においた指導を行った。大学入学共通テストを念頭に国語の課外授業を実施したことで外部模試で成果を上げるとともに、理科・社会の記述型問題への取り組みが良くなった。英語と数学においては発展的な問題にも取り組ませた結果、外部模試では回を追うごとに成績の伸張が見られた。</p> <p>2 学年：授業・課外においては1年次に身につけた基礎基本を自由自在に使いこなせるための次のステップとして、口頭試問・グループ学習を随時取り入れるなど、思考力・表現力重視の指導を展開した。また、文系理系別の指導体制の開始に当たり、理科・地歴公民の学習体制を強化することで、専門科目が入試の得点源となるように指導した。学年の共通目標として「英検2級全員合格」「SHクラス準1級全員合格」を掲げ、英語力の強化に努めた。</p> <p>3 学年：学校推薦型試験および大学入学共通テストを見据えた指導を早期より行った。特に、学校推薦型試験については出願者を早い段階で絞り込み、個別にきめ細やかな指導を展開し、志望理由書作成・過去問対策・面接指導などを重点的に実施することができた。また、一般受験に向けては、成績の習熟状況に応じて指導方針を分け、課題添削指導や論述対策指導、過去問演習、基礎確認テストなどを随時実施した。</p>	B
	②進路指導	<p>大学入学共通テストおよび新学習指導要領を見据え、難関国公立大学・私立大学へ多くの合格者数を出すことを目標に、一般入試だけでなく、様々な入試形態（総合型選抜・学校推薦型選抜）に即した指導を柔軟に行った。その結果、国公立大前期合格段階で、東京大学1名、筑波大学30名（医1名含む）、茨城大学19名、国公立大学103名の合格者を出すことができた。</p> <p>1 学年：面談を通じて文理選択に向けて職業・学問研究を進めたが、コロナ禍において活動が制限された状況は否めず、進路に対する意識の醸成はまだ不十分である。インタレストラーニングを中心とした探究型学習を通して、知的好奇心を高める指導を行った。</p> <p>2 学年：コロナ禍ではあったが大学訪問やオープンキャンパスへの参加など、徐々に体験的な活動を再開させることができた。また、オンラインでの研修会への参加や、各大学の学生募集の詳細などアンテナを高くして情報収集にあたり、高大接続改革に関わる新入試制度の生徒への周知を随時行った。その結果、学校推薦型選抜に早期に意識して専門分野への理解を深めようとする生徒もでてきた。</p> <p>3 学年：学校推薦型入試を活用し、生徒の第一志望合格および国公立大学合格に繋げる指導を行った。また、個人面談を充実させ、進路希望に対する課題の把握に力を注いだ。LHRを中心に入試制度についての指導を継続し、ミスなく受験に臨ませることができた。</p>	A
	③生徒指導	<p>挨拶の励行およびルール・マナーを守る社会性を身に付けることを念頭においた指導を行った。</p> <p>1 学年：挨拶・規律の徹底を図った。生活指導全般において、生徒に対しての遠慮や妥協は一切行わないが、一方的な指導ではなく、論理的に繰り返し説明し、生徒が理解した上で自発的な改善が図れるよう、知性に問いかける指導を心掛けた。</p> <p>2 学年：個性を認めながら、場に合った服装や髪型を常に意識させ、安易に流されることがないように指導した。また、昨年度SNSでのトラブルが発生したことを踏まえ、個人情報の漏洩や他人への誹謗中傷などのトラブルに巻き込まれないように十分に指導した。いじめをテーマにした総合学習を実施し、他者への配慮の大切さを理解させた。</p> <p>3 学年：社会の一員としての自覚ある言動と行動の確立を目標に掲げた。受験を控え、学習や進路への悩みを抱える生徒に対しては、保護者や教育相談部、スクールカウンセラーと連携を取りながら対応に当たった。</p>	B
	④特別活動指導	<p>1 学年：体育祭や文化祭、蓼科宿泊学習などの活動が徐々に再開されたことで、集団の中での協働の経験を重ねることで、良好な対人関係を築く機会を設けることができた。また、ネイティブ教員による発話・スピーチ指導を行い、主体性の育成に努めた。</p> <p>2 学年：修学旅行が再開されるなど集団活動をできる場が徐々に増え、文化祭や体育祭など学校行事についても積極的に取り組ませた。その結果、集団への帰属意識を養い、友人と協力して一つのことを成し遂げる達成感を体験することができた。</p> <p>3 学年：志望理由書の作成など進路学習を中心に学問的な興味関心につながる課題について調べたことで、学校推薦型選抜や一般入試に向けた基礎を確立することができた。また、これらの活動を通して級友との絆や自己の進路への意識を深めることができた。</p>	B

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況
グローバル・スタディ コース	①学習指導	実践的英語力・論理的思考力の基礎を身につけ、問題解決能力を向上させることが目標である。 1学年：アクティブイングリッシュにおけるプレゼンテーションを通じて、論理的思考力を養うことができた。また新書の講読と論文指導により、クリティカルシンキングの基礎を身につけることができた。英語能力向上では英検を準1級2名、2級11名が獲得している。 2学年：アクティブイングリッシュにおけるディベートを通じて、論理的思考力及び批判的思考力を養うことができた。英検は準1級3名、2級18名が資格を得ることができた。 3学年：アクティブイングリッシュにおいて高いレベルの論理的思考力及び批判的思考力を養うことができた。学校推薦型選抜や総合型選抜入試に必要な表現力中心の学力だけでなく、基礎力重視の日大基礎学力到達度テストへの適応もできた。英検は準1級5名、2級25名、IELTS5.5（英検準1級相当）が5名、IELTS6.5（英検1級相当）が3名が取得し、力をつけて卒業させることができた。	A
	②進路指導	コースの持つ特性を生かし、生徒の進路意識を学年ごとに高め、社会に対する興味関心も深めることで、推薦入試を上手に利用した進路指導を目指している。 1学年：LHR、総合学習、オーストラリア短期留学を通じて、生徒一人ひとりの興味関心のある分野の探究を促すことができた。 2学年：LHR、総合学習、カナダ中期留学を通じて、生徒一人ひとりの興味関心のある分野の探究を促すことができた。 3学年：推薦入試に向けた指導を早期に開始し、各種作文の添削指導、面接指導を回数を重ねて実施し、例年と遜色ない成果が得られた。一般入試に対する受験対策指導も一定の成果を残すことができた。慶応1名、上智2名、明治2名、立命館3名、ICU・同志社・青山学院・立教・中央・法政に各1名、日本17名、そして国立大学1名、海外大学2名の合格実績が出ている。	A
	③生徒指導	生徒のバックグラウンドや個性を考慮した指導を心掛けた。その中でも身だしなみを整え、グローバル意識を持って生活することを目標にしている。一部の生徒間でSNSを起因としたトラブルが発生したが解決し、その後は基本的に落ち着いた生活を送っている。国際的に活躍するために必要な多様性と柔軟性をもった生徒の育成につなげたい。	B
	④特別活動指導	海外留学が再開したが、同時にオンラインプログラムも実施し、他国の学生との交流を持つことができた。コースの新たな特色のひとつとなり得る。運動部に所属するものもいるが、音楽部やダンス愛好会など新しい活動に熱心に参加するものや、委員会の中心となって活躍する者もいて、全般的に積極的な活躍振りが目立った。	A

校務分掌	評価項目	設定や点検の内容・活動の進捗状況	目標設定・活動点検の適切さ・活動の達成状況
情報処理	①目標の設定 について	学習指導要領改訂にともなうシステムの変更 大規模なシステム改修が必要となったため、情報処理室の人的資源は通常の運用業務以外はすべてここに充てた。もし2つ以上の目標を設定していたら、この目標の達成は危うかった。	A
	②活動の実際 について	令和4年度はカリキュラム改訂に加えて、観点別評価が導入されたため、校内での成績評価法が大きく変わり、大規模なシステム改修が必要となった。土浦・岩瀬・中等教育学校それぞれ異なる評価体系だったため、システム設計に多くの時間を割き、多様な評価体系にも対応できるシステムを構築する事ができた。	A
	③活動の点検 について	土浦・岩瀬・中等教育学校それぞれの仕様が全年度内に確定されなかったため、一部の機能なしでの運用開始となった。そのため「期間外修正」等一部の例外処理で完全性が失われ、実行後の手作業が必要になっている。	B